

◎巻頭特集

# 生誕百年を ふりかえって

## 中原中也記念館 館報2008

13

Public relations magazine  
第13号

◎常設テーマ展示

「友情—君と僕との命はかぶり」

◎新収蔵資料紹介

「ランボオ詩集」

高田博厚「中原中也像」

◎特別企画展示

「小林秀雄と中原中也」

◎企画展示ピックアップ

「私の好きな中也の詩」

「中也の住んだ町 京都」

中也忌

特別展示

主なできごと(平成19年度 行事記録)

第13回中原中也賞受賞作品

平成20年度行事予定

*Chuya Nakahara Memorial Museum*



# 生誕百年を ふりかえって

## 中也生誕百年に寄せて

福田百合子

地域の方々と共に実行委員会を立ち上げ、無事生誕百年を祝うことが出来ました。また、ご縁に繋がる全国各地のイベント開催も盛り上り、嬉しい限りです。皆様方に心より感謝申し上げます。中也初期短歌『末黒野』の中の「温泉集」にならって、「捧げる歌十首」。

春陽射し温泉の神祀るとして細青竹をそよがせ囲ふ

中原中也歩みそめにし温泉の地熱伝ふる湯田一丁目

生誕百年祝ふ温泉祭とて白狐に詩人異形諸諸

「カフェ・ド・中也」旧銀行店舗内いかにもそれらしき表情にあり

今年五月晴れ間少なくサーカスの土間冷え冷えと中也祭続く

中也賞「みちのく鉄砲店」作者叫ぶ「おつかあ、生んでくれてありがとう」

大江健三郎氏中也詩労作と述懐母音子音踊る前夜祭

「また来ん春……」を一番好きと光さん作曲演奏の後に読むメモ

福島泰樹絶叫大テント下に吸ひ込まれゆく湿る大地に

一人芝居イッサー尾形の弾くギター中也の姿影も日向も（「文芸山口」二七五号）

2007年4月29日の青空  
（中原中也記念館前庭にて）

## 中也詩に魅せられて

加藤燿子

## 初めてのおつき合いは「正午」

昭和二十七年秋、詩人和田健氏より「詩と舞踊の夕」へのお誘いを受け、山口市に居を移し三年、中也さんの存在を知り「在りし日の歌」を求めた許りの私でしたが、即座に「正午」を演らせて頂きますと御返事を致しました。

あの頃はそれが当たり前の時代だったのかもわかりませんが、先ず御母堂フク様への御挨拶に中原家へ参上、その後、その頃は人家も疎らな吉敷の畑の中の中也さんのお墓へお詣り、やっとお許しを頂き作舞に入り、旧山口市役所の議事堂(現・山口中央郵便局)の小さなスペースで踊らせて頂きましたことを覚えて居ります。

## いつの間にか十八詩

以後五十年余に亘り、節目ごとに「別離・幻影・骨」等々を創作、上演させて頂いて居りますが、同時に種田山頭火、金子みすゞ、まど・みちお各氏の作品も型にさせて頂く様になり「山口県の先人達をテーマに作舞する現代舞踊家」とも言われ

る様になって居りますが、何故か又「中也詩」に舞い戻り、その数十八詩になりました。

## 「春日狂想」に懸ける想い

中でも「春日狂想」は、初演を平成六年と記憶致しますが、何故この詩をと、いま考えましても定かではありません。何かが言いたくて、そこにあるものの実態・表情・等々見えなくて、この詩の表現体になることは不可能にも思いましたが、けれどもそこが魅力で「能面」を使うことを思いつき、能面師の矢次李忠氏に白塗で止めて頂くと言う無理を御願い、目鼻の無い分、それぞれの個性が現れ、これは成功でした。

その面の人々を心理描写的な存在に、中也は「黒づくめの男性」、女達は「喪服に風車を持ち」、文也の死の場面より入ると決め、森脇憲三先生(福岡教育大学名誉教授)に作曲を依頼。曲と言うより、心音とでも言うような曲になり、平成六年「河上鈴子記念・現代舞踊フェスティバル優秀賞」、平成九年「江口隆哉賞」を頂くことが出来、その後も新国立劇

場、静岡芸術劇場等、十二会場で演じ続けて参りました。

そして昨年、中也生誕百年祭のオーブニングセレモニーの一場面として「春日狂想」を、との作品指定の御依頼を頂き、十三回目の上演を前に私の中の何かがざわめきまして、以前より懸案の動かすことのできるステージを思い立ち、早速、やまぐち国民文化祭のステージ考案の江頭良年氏(舞台美術家)にお願い、当日御覧頂きました装置が加わり、作品はもう一廻り大きくなりました。

念願叶い私一人は喜んでおりましたが、大変なのは「面」の踊り手。見える範囲は正面のみ、赤色照明の時にはそれさえも見えなくなり、踊り手同士の距離、動く装置に合わせての立位置、出入り、衣裳着替、等々、殆どお互い「感」のみで踊っております。

又、その装置を曲に合わせての移動役の黒子も、当方のスタッフ(中学生三人を含む)ですから、一人迷いましたらパニック状態間違いなしの緊張の連続。客席の一番隅で観ております私は…それはもう…心臓がどうにかかなりそうな位、でしたが、お陰さまで当方の六十周年の記念公演のラスト作品としても再演致しました。

## 「四行詩」の奥深さに

昨年はその後もご縁があり、「第一回山口市総合芸術文化祭」に中也記念館の御協力を頂き、「創作集・アンソロジー 中也の時間」と題し、山

口文化協会として関わり、山口・長門・岩国の三カ所で公演。お陰さまで好評を頂くことが出来ましたが、ラストシーンに「四行詩」を頂きました。

弱冠三十才で亡くなられた早逝の詩人ならではの御言葉と改めて感じ、まだまだ何かの折に創らせて頂きたいと願って居ります。

(現代舞踊家)



現代舞踊「春日狂想」

## ホラホラこれが僕の骨

くぼくにとつての中原中也

あがた森魚

「一切は、不定だ。不定で在り方は、一定だ。」

(中原中也「芸術論覚え書」より)

中原中也の詩は、人の心に生きる「人類の青春」だ。そして同時に、ウハキはハミガキ、ウハバミはウロコ……と、ダダ音楽のパンクロックでもあるかもしれない。

いまここでは、私も「音楽」をおこなう一人の親近者として、中原中也への愛着、親しみを表明してみたいとおもう。

多くの戦後世代のともがら同様、この私も、デイズニーや東映のチャンバラ映画で育ち、そこに表現や物語の世界を知った。小学5年の時、芥川龍之介の「蜘蛛の糸」をラジオドラマで聴いて、中学に入ってゴッホの画集を観て、そのゴッホにはゴーギャンという表現上の同志がいたことを知って「表現」というものは、映画や遊園地や博覧会とも違う、現実とはかけ離れたところにある理想や空想や虚無に向って、あてどなく熱く果てしないものを求める営みなのだ……ということに徐々に気付いていった。(その素晴らしさと同時にそれを遂行する馬鹿らしさ、

リスクの大きさ等々にも、やがて気付かせられるのだが。)

そういうことを、徐々に知りはじめた十代半ば。やがて、多くの表現者……コクトー、ジュール・ベルス、レーモン・ルーセル、辻潤、坂口安吾、谷崎潤一郎……、そして稲垣足穂やジョン・レノン、林静一やポップ・ディランといった、一見脈絡のない作家やアーティスト達に出会いながら自身の不確定な音楽表現が始まる。

そして中原中也の存在をイメージするとき、彼は、希有の詩的才能と同時に、ベルレーヌにランボーがいて、ゴッホにゴーギャンというともがらがあったように、富永太郎、小林秀雄、長谷川泰子……といった同志、先達、伴侶がいた。それら有志達との交流、そして生活そのもの。それによって培われた表現。全てが、嫉妬したくなるほど万全ではないか。

父親の溺愛ないしは厳しさに反発を抱いたことや、兄弟や愛児文也の死、長谷川泰子との恋愛と別れ、そして富永太郎、小林秀雄との錯綜する親交。それは人間くさい親交であり、自ら詩人であるための必然、宿命でもあっただろう。

長谷川泰子が、中也と同棲してい

た頃、書き上げた詩を中也が読み上げてくれるその幸福に涙したというエピソードは、それそのものが永遠にそこに刻印された「人類の青春」とでも呼ぶべきものであったのではないか？

この僕自身が、林静一の漫画「赤色エレジー」に感銘して歌を作ってしまったのも、たかだか四畳半のアパートの幸子と一郎という清貧な二人の愛の営みに「人類の青春」が、凝縮されていたからに他ならない。そのつつましげな青臭くも心もとなき棲息を、無軌道で無目的な若気の過性の悲哀(郷愁)と受け取るのか？

この銀河系の片隅の四畳半みたいな地球に、ほんの百年ほつちの不確定な営みを宿命つけられてる人類もまた宇宙的郷愁に裏付けられていないとは誰が断定しうるだろう。

この21世紀にあつて、われら総体が宇宙の片隅の一見老成した、しかしその実、青臭い児童のような存在であることを、だれが否定できるだろう。少なくとも、それらに対する敏感な感性、認識があったからこそ中原中也は「人類の青春」たる詩人たりえたらう。

確かに、中原中也はアルチュール・ランボーの影響下、その翻訳もし、フランス象徴派の影響下の詩人としても知られた。そのキャラクターやその生き姿や「人類の青春」たる表現力の瑞々しさによってこそ彼が詩人として認知されるが、彼の出発点にダダイズムの詩人という重要な立場があったことは貴重だ。

ダダイズムは、1916年スイス・チューリヒの「キャバレー・ボルテール」から始まったとされるが、音楽

や詩の朗読といったパフォーマンス等により、既存の秩序や価値観への問いかけ、否定、破壊がもくろまれた日本のダダイズムは1920年に萬朝報に載ったダダに関する記事を読んだ当時19才だった高橋新吉が、それに触発され「ダダリスト新吉の詩」を発表し、その詩集に触発されて中原中也が「ノート1924」にダダイズムの詩を書いたのだった。

1920年代「ダダ」は様々なかたちで展開するが、その根底には現実否定というより、無邪気ともいえるニヒリズムが踊っていた。中原中也のダダ詩もまたそれに呼応表明していた。彼のトレードマークだった黒いフェルト帽と黒マントは、現実に対するダダの武装だったが、レトリックの無意味さと呼応して、その無邪気さは奇異というよりはお茶目な貴公子の姿にすら見えるのが不思議だ。

関東大震災の混乱とも呼応したダダイズムが、アナキズムにも流れ、やがて消滅していったのは、一見平和な今日とも呼応しているのかもしれない。(チューリッヒ・ダダは第一次世界大戦への反戦、厭戦から始まったが、それは、60年代のジョン・レノンやウッドストックネーションに象徴されるLOVE & PEACEとも並列するムーブメントだったのではないかと、僕はどうしてもイメージしてしまうのだが……)

ホラホラ、これが僕の骨だ、生きてみた時の苦勞にみちた

あのけがらほしい肉を破つて、  
(中原中也「骨」)

今日では、個人的悲しみすら一人称の当事者として表出共有することは希薄だ。恋愛も、エロティシズムも、宗教観も、金銭感覚も、あれもこれも隠蔽され続ける。しかし、それは消失したわけではなく、内奥には著しく健やかにたおやかに育まれているはずだ。現代の「人類の青春」がシャイで傷つけあいたくないのはわかる。しかし、昨今の、発露をばき違えた場合の「恩讐」が、かくも血なまぐさいのはなぜなのだろう？

成熟した社会でもあるとおもう。スマートである。道義も、悲しみも、訳知り顔で語れる。「涙そうそう」も「世界に一つだけの花」も、みんなわれわれのものである。人の悲しみを知り人を手助ける歌が町中をおおいつくしている。今日のシンガーソングライターは、みなまるで中原中也かようである。

中原中也はますます幻の詩人として、これからも「人類の青春」像たりうるだろう。  
(ミュージシャン)



# 展示

「中原中也と富永太郎展」二つのいのちの火花（四〜六月） 神奈川県 神奈川近代文学館

豊富な資料が二の詩魂の交錯を語る、

## 特別展「中原中也と富永太郎展」

### 二つのいのちの火花」を振り返って

鎌田邦義

当館では、昨年4月21日（土）から6月3日（日）まで特別展「中原中也と富永太郎展 二つのいのちの火花」（共催：中原中也記念館、編集委員：中村稔氏、編集協力：中原豊氏）を開催しました。鎌倉で最期のときを過ごした中也については当館でもこれまで常設展や特別展でごく部分的に取り上げては来ましたが、本格的な特別展は今回初めてでした。企



画に当たって中村稔先生の御示唆をいただき、中也が詩人として出発する契機となった富永太郎との出会いに焦点を当てたことが今回の展覧会の最大の特徴でした。二人を採り上げるに際しては、6歳年長の太郎が中也と出会う以前に、すでに詩人、画家、教養人として自らの世界を確立しつつあったという視点に立ちました。そして他人の容喙を許さないほどの交友を結ぶなかで、中也が太郎から多くを吸収し、かつ反発しながら、自らの詩世界を作っていた軌跡をたどるよう試みました。会場は「第1部 富永太郎と中原中也 出会いまで」「第2部 二つのいのちの火花—'egoist' and 'amicus'の日々—「第3部 中原中也 詩の世界」の3部構成としました。第3部の中也のコーナーはいわゆる編年体にせず、「述志」「死への親近」などテーマ別に分ける展示を試みました。これには、中也詩の特性を端的に示せたらという意図がありました。その結果、通常大きく取り上げる交友関係に関する展示部分は絞った内容になりました。中也に比べて一般に語られること

の少ない太郎ですが、資料の大部分を所蔵する当館としては、今回の展示を機に太郎をクローズアップしたいという願いもありました。中也記念館所蔵の太郎の正岡忠三郎あて書簡と併せ、現存する太郎資料の重要なものをほぼ出品できたと思います。全集も無く研究の充実が待たれる太郎ですが、展覧会后、資料の閲覧も増え今後が期待されます。太郎の恋愛事件をめぐる父親の手帖について、担当者の池上聡が「中原中也研究」12号で「富永太郎の年譜的事項について—富永謙治日記紹介」として報告する場をいただきました。中也自身の重要資料は、草稿、ノート、書簡などほとんどの資料を中原中也記念館からお借りしました。

会期中、年代、地域とも幅広い層が御来場下さり、最終日に入場者は8200人を超えました。アンケート結果を見ると、詩人が原稿の前にいるように感じたという感想や、言葉に命を賭けて天逝した二人の生き方に感じ入ったといった回答が多く寄せられました。関連行事として行った毬谷友子さんの朗読会、窪島誠一郎氏、高橋睦郎氏の講演会等ともども、作品の新たな魅力や詩人の生涯への知見が深まったといった感想をいただき好評を得ることができました。その他、太郎自刻の版木から刷った木版画セットと同図柄の絵葉書を製作、頒布しました。

最後になりましたが、全面的に御協力いただきました中原家、中原中也記念館の皆様をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。  
（神奈川近代文学館 展示課）

## ボランティヤ

カフェ・ド・中也（四〜五月） 山口市  
銀行の旧店舗を改装して期間限定のカフェを運営、

### カフェ・ド・中也

藤井和佳子

中原中也生誕百年の記念行事の一環として期間限定でオープンした「カフェ・ド・中也」。

山口銀行旧湯田支店店舗は、地域の皆さん、近隣の店舗の皆さん、ボランティアの皆さん等の協力によって、温かい手作りカフェとして生まれ変わり、中也や中也の故郷である湯田の町に触れていただく場として、期間中多くの方に足を運んでいただきました。お客様として来て下さった方が、ボランティアとして協力したいと申し出てくださいることもありましたし、逆に、当時の懐かしいお話をお客様から聞かせていただくこともありました。



店内の様子（中央が藤井さん）

## 演ずる

「中原中也のつくり方ワークショップ」十発表公演(六〜七月 山口市)  
〜イッセー尾形・森田雄三両氏と一般参加者がつくりあげる詩人の空間〜

## 「中原中也のつくり方」 イツセー尾形ワークショップ

山下朱実



稽古中の森田氏(右)と参加者

この「つくり方ワークショップ」では、中也そのものではなく、中也を生み出した山口の地や、誰の心の中にも潜んでいるそれぞれの中也を描いていたようでした。夢があったり、孤独だったり、何があるうと変わらず続いていく日常だったり、家族だったり……。

遅すぎると嘆く人。そして、聞こえてくる蟬の声……。空気の動かない舞台に風が吹き抜けた瞬間でした。稽古場では、常に「中也に対して批判的にならないで。全てを受け入れるところから始めて。」と言われました。どこに行つて何をしてきたとしても、ここが帰ってくる場所であることを愛おしめるように……。なぜだか不思議と優しい気持ちになつた一週間でした。

(劇団演劇街所属)

## 描く

中原中也レセプション(八月 福岡県)  
〜書と絵画と歌声が会場に満ちた日〜

## 中原中也レセプション

鵜島桐

なじみのある言葉に、懐かしい響き。それは「おはよう」とか「おやすみ」とか「さよなら」とか。日頃の挨拶のように、本当の意味は分からない。けれど、伝えなければいけないと感じる言葉。

中也の詩に、僕はその美しさを見る。昨年福岡で行なわれた「中原中也レセプション」では、中也を愛する若手の画家や、中也に影響を受けたミュージシャンが、詩人・中原中也を自分たちなりに表現した。僕自身は、普段水墨画家として暮らしているが、この時は主催団体の代表として、筆をもつて書にあたり、中也の詩を計三十二篇書き起こした。

詩が呼ぶままに、筆を運んだが、中也の詩は常に、節度と命の緊張感をはらんでいた。

言葉は科学だが、詩は心であると思う。中也の詩に、僕はその美しさを見た。いつも初めてなのに、懐かしい優しさまで、中也は僕に教えてくれる。(アーティストワークスLamp代表)



鵜島さんの作品

## 歌う

第5回山口国際交流芸術祭  
「中原中也生誕百年記念トーク&コンサート」  
(八月 山口市)

〜中也が愛聴した曲と中也詩を歌った曲〜

## 「トーク&コンサート」 をめぐって

林満理子

昨年コンサートでは、諸井三郎、清水脩、石井欽、3人の作曲家による中也の歌曲を、バリトンの原尚志さんとともに演奏しました。プログラムの5曲のうち「春と赤ん坊」以外は声種の指定がなく、テノールによって歌われる事が多い「サーカス」にソプラノの私が挑戦しました。語りのような調子で進みながら、サーカス小屋の情景、空中ブランコが動く様を、躍動的に力強く表現しなければなりません。音域的に全く問題はないのですが、力強さの表現は女声にはなかなか難しいように感じました。また、意外に大変だったのが楽譜の入手です。選曲中、多くの作曲者が中也の詩を扱っていることが分かりましたが、絶版等の理由で手に入らないものもありました。これは大変残念な事です。世間に知られていない中也の歌曲がまだ多くあるように思います。中也の魅力溢れる歌曲が、多くの人々の耳に届くよう願うとともに、私も微力ながら紹介に努めたいと思っています。

(声楽家・山口大学教育学部講師)



## 演ずる

北九州市民による「私の中の、中原中也」展  
(九月 福岡県)  
〜書・絵画・写真・生け花・朗読・演劇・音楽の多彩なコラボレーション〜

## 中也と門司赤煉瓦館

弓田真西

「私の中の、中原中也」と題した総合文化祭は北九州で活躍するアーティストが中原中也の詩を基に各々の感性で表現した作品(絵画・写真・生け花・書・絵手紙作品など)の展示、講演会、詩の朗読・音楽・演劇のステージ、映画無料上映会など内容盛り沢山のイベントとなりました。

今回は実行委員として、また朗読ライブの出演者として参加し、手探りの部分も多く苦労することもありましたが、それ以上に沢山の嬉しい出会いがありました。詩との出会い、作品との出会い、音楽との出会い、そして人との出会い。特に印象深かったのは、生花とピアノとのコラボレーションで朗読した「湖上」……この美しい言葉の調べを、清らかなピアノの音色と優しく生けられていく花々に囲まれて表現出来たことは、私の中の宝物の瞬間となりました。

今もおお愛され続ける中原中也の世界を身近に感じることの出来た生誕祭でした。



# 撮る

中原中也生誕100年祭 IN FUKUSHIMA(九月 福島県)  
朗読・創作能・対談・写真に思つて詩人のことば

## 中原中也生誕100年祭

### in FUKUSHIMA

#### 高久美和子

福島では、生誕百年事業のひとつとして、県内で活動する写真家達による「汚れつちまつた悲しみに……」の続きを写真で表現する、という企画を設けた。

私たちの日常はいつも美しい景色に彩られているわけではない。かといって日常が汚れているのでもない。汚れているのはそう感じている自分自身。

そんな「汚れつちまつた」という完了形に込められた諦めの先に見える風景とは何なのか。

中也の詩の先を感じた写真家達による写真が、何かしらの力を放つていてくれることを、私は願っていた。

中也が完成させた詩の世界を写真で見たくはなかった。写真家の心象風景を通して、この詩に流れる諦めの呪縛から救われたいと思っていたのかもしれない。死者の諦観ではなく、今を生きる者として。

中也を、詩を、誰かに教えられるのではなく、自分で認め、先を見つめる力が欲しい。中原中也の生誕百年に際し、縁あって写真展示の機会を得た写真家として。

(写真家)



中也の詩を熱唱する如月さん



# 歌う

中原中也生誕100年没後70年記念  
「中原中也の世界」(十月 東京都)  
〜シャンソンに歌われた中也詩の世界〜

## 中原中也と

### シャンソン歌手

#### 如月伶生

私が中也の詩を歌いたいと思ったのは、10年前、帰省した折の「中也記念館」でだ。そこには教科書でしか知らなかった中也の詩や人生が、明るい柔らかな日差しの中で生き生きと息づいていた。そして視聴コーナーで「石原裕次郎」の「骨」を聴いた瞬間、中也をシャンソン歌手の私が歌うことを使命と直感したので。以後、詩集を何度も読み、歌う曲を選んできたけれど、どれも歌いたい詩ばかりだ。私の中也へのアプローチは感覚であり感性だ。パリに憧れた中也、故郷を思う中也、なんだか不器用な生き方、中也の様々な思いを私自身と重ね合わせて歌ってきた。「中原中也の世界」というCDを発表し、公演を続けながら一層中也の魅力に嵌って行っている。昨年はNHK・ETV特集でも取り上げて頂いた。故人となられた中原美枝子さんと伊藤裕郎さんに頂いた温かいお手紙は私の宝物だ。もっと生きて書きたかったであろう中也の人生を私は生きて、歌い続けて行きたい。

(シャンソン歌手)

# 歌う

朗読劇「子守唄よ」―中原中也をめぐる声と音楽のファンタジー―  
山口公演(十月 山口市)  
〜クライマックスに響いた子どもたちの合唱〜

## 朗読劇「子守唄よ」に出演して

#### 田村滯

私は昨年、合唱団で「子守唄よ」という朗読劇に小口ゆいさんと東京芸術大学の「ボイス・スペース」という団体と共演させて頂きました。「子守唄よ」という曲は、中原中也が「僕は本当は孝行者だったんですよ」と言っているように、お母さんを大事に思っていることを詩にして、「ボイス・スペース」の人が作曲したものです。この曲を歌っていると、中也のお母さんに対する、ありがたいという気持ち、離れていても大切にしている気持ち、心がぐっととききました。この朗読劇が終わった後、来ていたお客さんの中に泣いている人がいたので、私は「中也の心や、気持ちを知ってくれた人がいたんだなあ」と思いました。

私が中也という名前を知ったのは三歳の頃です。私のおばあちゃんが大阪から遊びに来た時に、中也記念館を案内しました。その頃は、中原中也とは詩人であるという事しか知りませんでした。でも本当は、いろいろな試練を乗り越えてきた、本物の詩人でした。

私は中也の事をもっと知りたくなり、中也記念館に行ってみました。その頃からもう、詩を書き始めてい

ました。自分の大切な人が亡くなって、ショックでいろんな事があるれてきて、書けたのでしょうか。私が初めて詩を書いたのは二年生の時で、将来の夢について書きました。自分の気持ちはあるけど、なかなかいい言葉が出なくて、とても時間がかかりました。何回も書き直したり、意味が分からない文があったりもしました。でも中也は、すぐに思ったことが言葉になっていて、とても強い感情があったんだなあと思いました。私は、最初は中也の事はよく知らなかったけど、「子守唄よ」の曲を歌うことになったおかげで、中原中也に興味を持ち、生涯などを知れて、とてもよかったです。今度は、中原中也の書いた詩を一つ一つゆっくりと読んでみたいです。

(山口市平川小学校合唱団団長)



中也に一度会ってみたい。

# 創る

朗読劇「子守唄よ」―中原中也をめぐる声と音楽のファンタジー―東京公演十月 東京都  
朗読と音楽によって詩人の生涯をたどる

## 朗読劇

### 「子守唄よ」―中原中也をめぐる 声と音楽のファンタジー―に参加して

早坂牧子

中也の母フクの語りと中也の詩や散文の言葉とを音楽で綴った本舞台に、脚本・演出補佐として参加させていただきました。以前から、中也の言葉は舞台表現に相応しいと感じていましたが、詩・書簡・日記・評論に至るまで、様々な中也の言葉を声に出して読み、選んだり捨てたりを繰り返す脚本執筆の過程で、その思いが確信へと変わった舞台制作でした。言葉自体の持つ魅力と、朗読女優小口ゆいさんの声、作曲家中村裕

美さんの音楽、VOICE SPACE（東京芸術大学現代詩研究会）の演奏とが加わり、まさに「声と音楽のファンタジー」の副題に相応しい作品となりました。中也の故郷山口での公開リハーサルでは、平川小学校の皆さんと共演できたのもよい思い出です。中也生誕100年という節目の年に、このような企画に参加できましたことを大変嬉しく思っています。

(VOICE SPACE代表)



撮影：大西成明

# 展示

企画展「中原中也 詩に生きて」(十一月 神奈川県)  
鎌倉文学館  
終焉の地・鎌倉でたどる詩人の生涯

### 「中原中也 詩に生きて」 をめぐる

小田島一弘

中原中也が、長男文也を亡くした心の傷を抱え、鎌倉に移ってきたのは、昭和12年(1937)2月27日のことです。一時は、友人へ宛てた手紙に、鎌倉のことを「鮑眉みたいなところ」と中也節で書き送るまで回復しませんでした。しかし、7カ月と26日目の10月22日、詩人は30年の生涯を鎌倉で閉じました。

昨年は、生誕100年であると同時に没後70年でもあり、中也が没した鎌倉にある当館で10月6日から12月16日まで、「中原中也 詩に生きて」と題した展示会を開催させていただきました。当館で中原中也の展示会は二度目で前回は平成10年、生誕90年の翌年に「中原中也 鎌倉の軌跡」と題し、鎌倉時代を中心にした展示会を行っています。前回、鎌倉に焦点を絞った展示をしているので、今回は、詩に生きた中也の生涯を作品と資料でたどることにしました。

集しなくなるまでを紹介しました。第一部と第二部の間には鎌倉コーナーを設け、中也の暮らした鎌倉を地図パネルで紹介し、鎌倉で書いた詩稿や中也が鎌倉で使った本棚等を紹介しました。代表的な詩を鑑賞しながら中也の生涯をたどる、という展示コンセプトから、各コーナーには大きな詩のパネルを展示し、また、中也の詩の世界をより深く感じてもらうため、第二部の冒頭では、作家のいしいしんじさんによる書き下ろしエッセイ「宇宙の擬音」をパネルに紹介しました。そして、詩に生きた中也の決意表明ともとれる『在りし日の歌』後記の全文を、展示会の最後に紹介しました。

現在、鎌倉文学館として利用されている前田侯爵家鎌倉別邸は、昭和11年に竣工しました。中也は、翌年の4月に弟と鎌倉大仏や長谷観音の見物に出かけています。その時、中也は歩きながら小高い山の中腹に建つ別邸を眺めたかもしれませぬ。中也が暮らした頃の風情を残すものは、年々減っています。そんな中、中也が暮らした鎌倉を見つめていた当館で、展示会を開催できたことに意義深いものを感じています。「中原中也 詩に生きて」には、63日の会期中に25,935人の方が来場されました。多大なお力添えをいただいた中原克子様をはじめ、福田百合子館長ならびに中原中也記念館の皆様にも深く感謝を申し上げます。

(鎌倉文学館 展示担当)





# 創る

生き生き「コンサート2007」中原中也生誕百年記念「日本の詩」十月 宮城県  
〜中也詩に基づいた楽曲の新たな展開〜

## 中也を作曲して

### ―天才の愛は永遠に向かっていた

鮎屋善敏

中也は自らの悲運な人生を、いと  
おいしい気持ちで私たちに語ってくれ  
た。

中也は人恋しい人で、愛の人だっ  
た。人間に愛着を持ち、同感を求め、  
詩のつくる芸術的美しさを知る人と  
して、心の詩を私たちに提供したの  
だ。

第九交響曲の三楽章がそうである  
ように、人情に執着する孤独な人間  
でなければ、ロマンティックな人間  
にはなれないだろう。

中也は詩をつくる時に、特に感動  
したり、反対に自虐的だったりとい  
う大げさな気持ちをではなく、ごく  
普通のままを語るようにうたった。  
そのために、中也の詩は肩が凝らな  
いが、それでいて墮落しない。

つまり、中也の高い精神性は強靱  
な生命力となって肯定的な力を持ち、  
感傷は陰湿な底に沈殿するはず  
がなかった。

中也の人への愛着は高潔な人格に  
よって人類愛へとまで昇華し、哀感  
は肯定的で純度の高いエレジーに高  
揚されて、私たちの胸に心地よく迫っ  
てくるのだ。

それを証明する中也の日記文があ  
る。「私は群衆に反抗する。私は群衆  
を愛してるからだ。」中也二十歳の言  
葉だ。彼の評論などを見ると、当時  
の墮落した社会に対する洞察力は並  
のものではない。しかも、人間の未  
来を憂う心情は……生命の真理を究  
めた天才にしか出来ない業だろう。

若くして中也は、己の持つ偉大な  
力を知ることによって、神のように、  
人類に幸せを提供するという使命感  
を持ち、未来の人々にまで愛の心で  
交わるつもりでいたのだ。

汚れつちまつた悲しみは死を夢み、  
汚れつちまつた悲しみに日は暮れる  
と、れんめんと続く悲しみをひっさ  
げながら、なおも詩をうたうことで  
人々に生きることへの愛着と美しさ  
を伝え続けた中也。私などは七十五  
歳にして、今なお、おろおろしなが  
ら生きているのだ。彼の並々ならぬ  
生命力に驚く。

燃えるような欲求を持って生きた  
人間が数々の不幸に遭遇しながらも  
世界中の人に愛嬌を振りまき続けた  
という、この「達観」は何だろう。  
私はこのような彼の偉大な感傷性



中也の詩を描いた  
鮎屋さん(個展にて)

を無意識に感じ取っていたのかわし  
れない。歌曲を作曲するときにはそ  
の時のイメージにあわせた作曲法の  
パターンがある。普通、悲しみの曲  
は短音階や陰旋法のメロディーに短  
調の和音伴奏がついてつくられるも  
のだ。

しかし、「汚れつちまつた悲しみに  
……」は勿論のこと、作られた歌は  
六曲とも長音階と陽旋法がミックス  
されたメロディーで出来ている。俗  
に言われる明るく喜びの世界を表わし  
得たか。

ある人から「とても親しみやすい  
曲をつくりましたね」と喜ばれた。  
気がついて見ると幸いにも私は中也  
の言葉に忠実に中也を作曲していた  
のだった。

(作曲家・創造学園大学客員教授)

## 各地で催された 生誕百年記念イベントの リーフレット



## 能「中也」の創作をめぐる

ナカシヨノブ  
 中所宜夫

昨年十二月に東京青梅の宗建寺で、新しい能「中也」の「能楽らいぶ」が行われた。「能楽らいぶ」と言うのは、能楽堂以外の空間で少人数の演者によって行なわれる公演に私が名をつけたもので、この日もお寺の本堂を舞台として、能のシテ方二人によって一曲が演じられた。

私は能に新たな生命力を吹き込もうと新しい作品の創作に取り組んでいる。数百年にわたって磨き続けられてきた能には、様々な秀れた要素があるが、私が取り分け素晴らしいと思うのは、その音楽の部分である。能が言葉に施している音楽を「謡曲」とか「謡い」と言い、これだけを取り出して楽しむことが、江戸時代から盛んに行われていた。「私の上に降る雪は、わが子中原中也を語る」によれば、中也の未亡人の中原孝子さんもお稽古されていたようだ。その謡曲は、非常に緻密かつ多様な音楽構造を持ち、日本語の持つ意味をとて、も良く伝える力を持っている。逆説的に言えば、数百年も前の言葉をそのまま使いながら、今もお生きた舞台芸術として能が存在しているの

は、この謡曲の力に負うところが大きい。

それでは現代の人々が分る言葉を謡いで謡ったらどのようなものだろうか。私が最初に取り上げたのは宮澤賢治の作品で、「農民芸術概論」と「雨ニモ負ケズ」を結びつけた新作舞「雨ニモ負ケズ」はご覧になった方々から大変評価していただいた。その曲舞をもとに創作した新しい能「光の素足」は、新作能としては異例の公演を重ねる幸せに恵まれているが、その初演の後に次作「中也」の創作が始まることになった。

初演の公演にゲストとしてお招きしていた詩人の和倉亮一さんから「来年は中也生誕百年で、福島でイベントをするのですが、そこで能楽らいぶをやって下さい」というお話しをいただいたのがその始まりである。

正直私はそれまで中也をほとんど知らなかった。しかし、多くの方に親しまれているという意味で賢治と中也は双壁なのではないかと思う。良い作品には魅力的な言葉が不可欠なので、中也の言葉を能に取り入れるのは今後の創作にも益するところは

多いと思われる。かくして私の中也探求が始まった。

詩集にざっと目を通してみるが、そのまま節付け出来る詩は案外と少ない。賢治もそうだったが、定型によらない作品は、言葉の流れの変化が多様で、それに対応する謡の形式を見つけることが難しい。一句毎に形式の変るような節付けでは良い作品にはならないだろう。「國文學」の特集にも書かせていただいたが、「また来ん春……」は七五調の変化の少ない作品であるから一つの作品として素直に節付け出来る。また「一つのメルヘン」は大ノリという運びを基調に、その美しく不思議な世界を描くことが出来る。対して「春の日の夕暮」は、俄には意味の判じ難い言葉が続き、情景や心象にも変化が多く、一応の節付けはしてみたのだが、基調となる形式が定まらない。

中也の言葉を使つたからと言って、その人を描かなければいけないというものでもないだろうが、中也初心者としては、中也を廻る物語にその素材を探ってみた。以下はそのあらすじである。

法華経に導かれて鎌倉・妙本寺を訪れた青年一郎が、祖師堂の傍らの石に人の思いが淀んでいるのを見て様子を見てみると、若者が「春の日の夕暮」を吟じながら登場する。一郎はそのような思いの淀みを流す仕事をしており、中也と小林秀雄との経緯を知って石に腰を掛ける。すると、一郎は小林に、若者は中也に憑依して、海棠の若木も昔の古木となつて、妙本寺での二人の会合を再現する。そして、「死んだ中原」を謡う

小林のもとに、中也の霊が登場し、詩人としての心残りを語って聞かせる。

能「中也」は中也の言葉を取り入れて一つの能としての完成を目指しているものだが、自身の理解不足のためにまだまだ不備な部分が多い。特に、中也晩年の不幸の解釈に私自身の迷いがある。しかし、中也の作品を謡ってみると、一見平凡な言葉の連なりと思えるような部分に、意外な奥行きを感じ、詩人の言葉というものの不思議さに思い至らずにはいられない。

(能楽師観世流シテ方)



中也役の鈴木啓吾さん(左)と小林役の中所宜夫さん(右)

## 生誕百年関連事業一覧

日時	タイトル	場所	主催
1月20日・27日(土)	和蠟燭の世界 ～ふるさと山口～	瑠璃光寺本堂(山口市)	山口商工会議所・山口お宝展実行委員会
2月10日(土)	中也百年 おしゃべりコンサート	山口市民会館小ホール	山口商工会議所青年部
3月10日(土)	中原中也生誕百年記念講演会 「中原中也～詩の中の少年～」	諫早市立たらみ図書館海のホール (長崎県)	諫早市立たらみ図書館
3月31日(土)	第2回特別企画展 「作家の直筆原稿でたどる〈文学・青春〉展」 文学講座「中原中也―生誕百年を迎えて」	北九州市立文学館交流ステージ (福岡県)	北九州市立文学館
4月8日(日) ～4月29日(日・祝)	空の下の朗読会	中原中也記念館前庭	中原中也生誕百年記念事業実行委員会
4月28日(土)	中原中也賞贈呈式&中也生誕百年前夜祭	山口市民会館大ホール	山口市
4月29日(日・祝)	SLやまぐち号出発式	新山口駅	山口線SL運行対策協議会・ 中原中也生誕百年記念事業実行委員会
4月29日(日・祝) ～5月6日(日)	サーカス小屋でコンサート	山口市中央公園横特設テント	中原中也生誕百年記念事業実行委員会
4月21日(土)～6月3日(日)	中原中也と富永太郎展～二つのいのちの火花	神奈川近代文学館(神奈川県)	神奈川近代文学館
4月22日(日)～5月6日(日)	吉田正写真展 Photographed by Sei Yoshida ―Imagination 光の言葉―	アテリエ セレーノ(山口市)	アテリエ セレーノ
6月1日(金)～7月29日(日)	山口県立図書館 月間資料展示「中原中也と山口の詩人」	山口県立山口図書館	山口県立山口図書館
6月2日(土)～3日(日)	日仏現代詩フォーラム 「中也とランボー 季節が流れる、城寨が見える」	秋吉台国際芸術村(山口県)	秋吉台国際芸術村・中原中也の会
6月5日(火)	フランスと日本の近代詩人	東京日仏学院エスパス・イマージュ (東京都)	東京日仏学院
6月25日(月)～7月1日(日)	「生誕百年記念―“中原中也のつくり方” ワークショップ!!」+発表公演	山口情報芸術センタースタジオA	山口情報芸術センター
7月22日(日)	中也の詩を読む 講演と朗読の会	山口県立山口図書館	山口県立山口図書館
8月19日(日)	中原中也レセプション	筥崎宮参集殿(福岡県)	アーティストワークスLamp
8月24日(金)	第5回山口国際交流芸術祭～ヨーロッパ芸術祭 「中原中也生誕百年記念トーク&コンサート」	C.S.赤れんが(山口市)	山口日独協会
9月8日(土)・9日(日)	中原中也の会第12回大会・第8回セミナー	ホテルニュータナカ・ 中原中也記念館	中原中也の会
9月16日(日)	中原中也生誕百年記念「NHKこども広場2007」	山口情報芸術センター・NHK山口放送局 ハートプラザ	NHK山口放送局
9月17日(月・祝)～23日(日)	中原中也生誕百年祭2007in北九州 北九州市民による「私の中の、中原中也」展	門司赤煉瓦プレイス 赤煉瓦交流館(福岡県)	中原中也生誕百年祭2007 北九州実行委員会
9月22日(土)・23日(日)	中原中也生誕100年祭 IN FUKUSHIMA	安洞院本堂・コラッセふくしま(福島県)	うつくしまプランチ
10月6日(土)～12月16日(日)	企画展「中原中也 詩に生きて」	鎌倉文学館(神奈川県)	鎌倉文学館
10月7日(日)	桑原英子ソプラノ・リサイタル	カザルスホール(東京都)	英会
10月8日(月・祝)	朗読劇公演「“子守唄よ”―中原中也をめぐる声と 音楽のファンタジー―」(山口公演)	山口情報芸術センタースタジオA	中原中也生誕百年記念事業実行委員会
10月14日(日)	如月伶生コンサート～中原中也生誕100年 没後70年記念「中原中也の世界」	音の箱(東京都)	『R』R 企画
10月16日(火)	第15回北九州演劇祭参加アトリエ芝居小屋公演 「汽笛」	ウェルとばたホール(福岡県)	アトリエ芝居小屋
10月20日(土)	構成吟「中也四季絶唱～生誕百年～」	防長苑(山口市)	實心流吟道寶水会
10月21日(日)	朗読劇公演「“子守唄よ”―中原中也をめぐる声と 音楽のファンタジー―」(東京公演)	サントリーホール小ホール (東京都)	中原中也生誕百年記念事業実行委員会
10月27日(土)	中原中也生誕百年記念セミナー 「中原中也をいまどう読むか」	神戸女子大学教育センター5階 特別講義室(兵庫県)	中原中也生誕百年記念事業関西実行委員会
10月27日(土)	山口芸術短期大学演奏会2007 in 山口	山口市民会館大ホール	山口芸術短期大学
10月27日(土)	中原中也生誕100年記念講演 「中也と金沢」と朗読	金沢市立泉野図書館 オアシスホール(石川県)	2007ビエンナーレいわ秋の芸術祭実行委員会・石川県・財団法人石川県芸術文化協会・石川県教育委員会・ 山口県文化連盟 他
11月3日(土・祝)	第1回山口県総合芸術文化祭メインステージ	山口市民会館大ホール	山口県・山口県教育委員会・ 山口県文化連盟 他
11月3日(土・祝)	生き生きコンサート2007～中原中也生誕百年記念 ～日本の詩	仙台市青年文化センターシアターホール (宮城県)	NPO法人 創る村
11月23日(金・祝) ～25日(日)	「あの頃、中也のいた京都展」	京都西陣町家スタジオ ギャラリー (京都府)	京都中也倶楽部
12月2日(日)	宗建寺能楽らいぶ「中也―詩人の面影―」	宗建寺本堂(東京都)	中所宜夫能の会
12月8日(土)・9日(日)	「大正ロマンと中原中也―あなただけに教える食べ ながら知る中原中也」	京都府庁旧館正庁 他(京都府)	京都中也倶楽部
1月26日(土)・27日(日)	「仙水会 有吉社中展～中也の詩と春のメルヘン」	電遊館エネルギー(山口市)	華道家元池坊山口支部(仙水会) 有吉シヅ子社中
3月20日(木・祝)～23日(日)	中原中也生誕百年記念ファイナルイベント 「みなさん、今夜は、春の宵。」	中原中也記念館前庭・山口銀行旧 湯田支店店舗・湯の町商店街他	中原中也生誕百年記念事業実行委員会



100本のキャンドルが灯された  
記念館前庭  
(中原中也生誕百年祭ファイナル  
イベント「みなさん、今夜は、春の  
宵。」より)

# 友情

君と僕との命はかぶり

平成20年2月21日(木)ー平成21年2月15日(日)

※特別企画展開催中は除く



## 小林秀雄ー好敵手として

大正14(一九二五)年、富永太郎を通じて知り合った小林秀雄。後に文芸評論の世界で大家となる小林とは文学的に共鳴するところが多くあり、好敵手としての友情を結びました。詩人と評論家という別の場所に立ちながら、小林は中也の詩を高く評価し世間への紹介に努めます。中也は上京して二年后、最初に詩「朝の歌」を小林に見せるなど、深い信頼を寄せます。

「小詩論」小林秀雄小論「我が生活」「詩的履歴書」などの原稿や、小林が中也の詩「骨」を紹介した「文学界」などの雑誌から、二人の関係を紹介しました。

## 高森文夫ー弟のように

昭和6(一九三一)年、中也は吉田秀和と同じに高森と知り合います。昭和7年、高森と中也は京都と奈良を旅行。同年夏、高森の郷里宮崎へと旅し、その後高森の伯母の家に転居、高森と高森の弟・淳夫と同居します。中也は、第一詩集の題名について相談したり、一緒に製材所をやるうとしたり、高森の詩集『浚漉船』の書評を書いたりしています。

近年見つけた高森撮影の中也肖像写真や高森宛のがき、高森の詩集などを展示しました。

## 安原喜弘ー心優しき友

昭和3(一九二八)年、古谷綱武の家で出会います。やがて二人の付き合いは親密となり、安原は『山羊の歌』出版に尽力、激しく周囲と

ぶつかる中也を支え寄り添います。中也は安原を故郷へ招き、手紙を書き、詩を贈ります。百通以上もの手紙。その内容からは、説明を必要とせず理解を示す中也、寡黙な安原の真意を知りたいと迫る中也の姿が伺えます。二人の友情は未だ謎を残しています。書簡や安原に預けた『山羊の歌』紙型などで紹介しました。

## 大岡昇平ー亡き友を追い求めて

昭和3(一九二八)年、小林宅で出会います。「白痴群」で同人となるも喧嘩して解散。会えば対立し、中也は日記にも詩にも大岡の批判を書いていきます。しかし、中也の没後、大岡は戦争体験を経て中也という存在をあらためて捉えようとしていきます。中也の伝記を書き、中也詩集や全集の編集にたずさわります。

喧嘩をする相手ー喧嘩のできる相手とは、意見は異なるけれども対等であり、お互いを意識し合う関係と言えます。詩「玩具の賦」や最初の全集などを展示しました。



友達、仲間、友人、親友…異なった呼び方があるように、友情にも様々なかたちがあります。確かなような不確かなような、家族とも男女のものとも異なる愛情。けれども、そのどちらにも近い感情…。友と自分の存在についてうたった詩「曇つた秋」を中心として、中也がどのように友達とつきあい、友情を結んだかを紹介しました。

## 展示Ⅰ 友人、中原中也

中也の友達とのつきあい方は独特なものでした。

ここでは、「引越し」「訪問」「喧嘩」「言葉遣い」「手紙」「友達の友達が友達」と六つの項目をたて、中也の友達との付き合い方を紹介しました。

## 展示Ⅱ 様々な友情のかたち

中原中也と交友のあった人物はたくさんいます。中也は文学について語る仲間を求めていましたから、文学史上に名前を残した人物もいますし、音楽家、彫刻家、装幀家など多い、多くの個性的な友人に恵まれました。

その中から、お互い影響しあった4人の友人に焦点を当ててもとの関係を紹介しました。



## 【新収蔵資料紹介】

### 『ランボオ詩集』

(昭和12年9月15日 野田書房)



平成19年4月29日、中也是百回目の誕生日を迎えました。その前夜祭として28日、山口市民会館で大江健三郎氏の講演と、ご子息・光氏作曲による「また来ん春……」の演奏会が催されました。

その際、思いもかけない「お土産」として大江氏よりご寄贈いただいたのが、中也の直筆署名入り『ランボオ詩集』です。自らの署名とともに、宛名には「渡辺一夫様」。フランス文学者で、大江氏の東京大学仏文科時代の先生にあたる人物です。大江氏が渡辺氏から譲り受けたというこの詩集は、昭和12(一九三七)年、中也の亡くなる一ヶ月前に刊行されました。この本の後記に中也は次のように書いています。

終りに、訳出のその折々に、教示を乞ふた小林秀雄、中島健蔵、今日出海の諸兄に、厚く御礼を申述べておく。

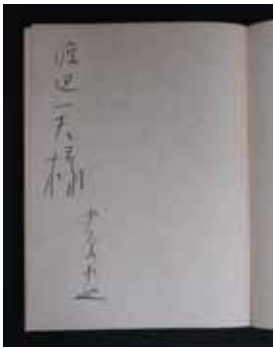
(昭和十二年八月二十一日)

大江氏は講演のなかで右の言葉を挙げ、この三氏に加えてもうひとり、訳出にあたって中也に有効な助言をした渡辺氏を紹介されました。

渡辺氏は中也より6歳年上、大正14年に東京帝国大学(現東京大学)仏文科を卒業し、この詩集刊行当時は同大学文学部の講師となっています。中也との出会いの経緯は明らかではありませんが、昭和3年に同仏文科を卒業した小林ら、前述の三氏の紹介があったのかもしれない。中也自身が渡辺氏に言及したものは日記にも書簡にもこれまで見つからず、今回ご寄贈いただいたこの『ランボオ詩集』が二人を直接結びつける現在唯一の資料です。

当時鎌倉に住んでいた中也は、刊行したばかりのこの本を持って渡辺氏宅を訪れ、玄関先で署名をして渡辺氏のご夫人に渡したそうです。後記にこそその名を挙げていませんが、そこには中也の深い謝意が表れています。この詩集は長く読み継がれ、翻訳者、中也の名に世に知らしめることになりました。

○大江氏の講演記録は『中原中也研究』第12号に収録されています。講演では、中也詩との出会いや、渡辺氏より『ランボオ詩集』を譲り受けた経緯についてなどが詳しく語られています。



### 高田博厚「中原中也像」

意志ある者のごとく、遠くを見据えながら、しかしどこことなく、この世の空を見てしまった人のような目で、少し首を傾げている、中也。彫刻家高田博厚(一九〇〇―一九八七)の作品です。作品が収められていた箱の面には筆で「中原中也」、裏書は「昭和三十三年作／高田博厚」とあり、高田の印も押されています。

平成16年2月のリニューアル以後にご来館下さった方であれば、二階に展示されている中也像をご覧になったことでしょうか。この度収蔵した中也像は、形態やプレートおよび箱書にある制作年から、それと同時期に制作されたと考えられます。

とはいえ、この事実はちょっとした驚きをはらんでいました。というのも、当館では同時期に制作された中也像を3体しか確認しておらず、つまり4体目が現れたことになるからです。また、箱と箱書の存在が初めて確認されました。

高田は昭和4(一九二九)年に中也と出会い、以後高田がフランスへ留学するまでの2年間、親交を深めました。知り合ってから間もなく、中也は高田のアトリエ近くに引っ越し、毎日のように彼の元を訪れました。後に高田は次のような回想を述べています。

中原は中原の論理を持っていた。それをしゃべりまくるのである。「お前の言っていることはわけがわからん」とよく私はどなった。すると彼はしよげてしまふのだから不思議だった。しかしまた方向を変えて同じことを論証しようとするのだが、やつぱりわからなかった。わからないことをしゃべる彼の方が好いのであり、またあれが判るようではつまらないのである。どのように糸道(いとみち)だった論証(ろんしやう)で感覚の深みは探れない。(中原中也)

高田は中也の人と詩を深く理解し、雑誌「生活者」に中也の詩を推薦、昭和5年には中也をモデルとして銅像を制作し第2回「国展」に出品しました。中也の死後、フランス在住中も、中也との思い出を記した随筆のなかで、彼を「本当の詩人」と高く評価しています(「旗」昭和24年4月号)。20年以上にもわたるフランスでの生活に別れを告げ、昭和32年に帰国した高田は、中也像が失われたことを知り、改めて中也像を造ることを決意。残されていた前作の写真を参考にして制作しました。

それ(前作の写真)引用者註を頼りに今私は落合の借アトリエでもう一度中原の首を作っている。あれから三十年たったから、すこしはましなものができると思いながら。中原は誰に向っても先輩だった。私にとっても先輩である。(同前)



特別企画展

HIDEO KOBAYASHI X CHUYA NAKAHARA

# 小林秀雄と 中原中也

平成19年7月25日「水」―9月24日「月・休」



中原中也を語る上で欠かせない友人、小林秀雄。小林と中也の関係は、大岡昇平をはじめ、多くの人々によって語られてきました。しかし、展示の主題として二人の関係を扱うのはこれまでありませんでした。展示では、二人の直筆原稿や書簡など、貴重な資料を一堂に集め、日本を代表する評論家と詩人との交流を、様々な角度から紹介しました。

## 展示1 出合い―富永太郎を媒介として

小林秀雄は中也より5年早い明治35（一九〇二）年に東京で生を享けます。白金尋常小学校を卒業し東京府立第一中学校に入学、そこで小林は画家志望の上級生富永太郎と出会います。小林はその後第一高等学校に進学、富永とともに雑誌「山繭」の同人となります。

富永は創刊号から続けて毎号に詩・訳詩を掲載、小林も第3号（大正14年2月）に小説「ボンキンの笑ひ」を載せています。富永の紹介で中也と出会った時、小林は東京帝国大学仏蘭西文学科に入学したばかりの大学生でした。

一方、中也は山口中学校を落第し、京都の立命館中学に転校。そこで講師をしていた富倉徳次郎が中也の詩才を認め、府立一中時代の同級生、富永太郎に中也を紹介し、意気投合した二人は、文学・芸術論をたかかわせるようになり、数ヶ月後、結核が悪化した富永が、療養のため帰京。追いかけるように中也も恋人長谷川泰子とともに上京。それからひと月も経たない大正14年4月2日、富永の紹介で小林のもとを訪れることになるのです。

展示では、富永を含め、3人の間で取り交わされた書簡を中心に、小林と中也の出会いを追いました。それらからは、小林と中也が出会って数日で親密な友人となったことが伺えます。



## 展示2 〈奇怪な三角関係〉 ―長谷川泰子を媒介として

小林と中也が出会ってからおよそ半年後の大正14（一九二五）年11月、二人の間を立て続けに事件が襲います。まずは富永が24歳の若さで死去。そしてその数週間後、中也の恋人、長谷川泰子が中也との生活に別れを告げ、小林のもとに身を寄せます。後に小林が「奇怪な三角関係」（「中原中也の思ひ出」と呼んだ3人の複雑な関係は、後々まで小林と中也の間に深い傷を残すこととなりました。

中也が小林の住所に近い高円寺に引っ越し

た頃から、小林と泰子が二人きりで会うことが増え、10月には二人で大島へ旅行する計画までたてられます。その計画は実現しませんでした。その後、小林が盲腸炎で入院し、泰子は見舞いに行きます。その時小林から「一緒に住もう」と誘われ、泰子は、中也のもとを去り小林と共に暮らす決心をします。小林が入院中の11月12日、富永太郎死去。11月下旬、小林と泰子は、杉並町天沼の家で新たな生活を始めました。

展示では、泰子に去られてから約4年後に書かれた中也の散文「我が生活」や、入院中の小林の病室に泰子がいたとの記述がある正岡忠三郎の日記などから、〈奇怪な三角関係〉の内実に迫りました。

## 展示3 『山羊の歌』／『文学界』 ―文学的交流

〈奇怪な三角関係〉は昭和3（一九二八）年に小林が泰子と別れるまで続きましたが、その間もその後も、小林と中也の、文学を中心とした交流が途絶えることはありませんでした。展示では、さまざまな視点から、二人の文学的交流について紹介しました。

中也は、昭和2年から昭和4年にかけて、小林への献辞を付した詩を1篇（「我が祈り」）、評論を3篇（小詩論「小林秀雄小論」[Me Volia]）書いています。その中から3篇の評論草稿を展示しました。これらの評論からは、当時の二人がどのような文学論をたたかっていたかを垣間見ることが出来ます。



草稿「小林秀雄小論」



小林は中也の詩を高く評価し、中也の作品

が広く読まれることを様々な形で助力しました。例えば、自ら編集に携わっていた雑誌「文学界」に、「言葉なき歌」「春日狂想」などに『在りし日の歌』に収められることになる多くの作品を毎月のように掲載しました。中也の第一詩集『山羊の歌』出版の際、中也に出版社（文圃堂書店）を紹介し、出版されるとすぐさま「文学界」に推薦文を書くなど協力を惜しみませんでした。また、このような直接的な助力ではなかったことが分かる資料が小林筆堀辰雄宛書簡（昭和8年6月25日付）です。そこからは雑誌「四季」の編集人をしていた堀に対し、小林が中也の詩を「四季」に推薦していたことがわかります。

小林と中也の文学的交流で忘れてはならないのが、アルチュール・ランボアの翻訳者としての側面です。展示では、小林の『ランボオ論』、中也の翻訳草稿などの資料とともに、二人の同詩訳を並べ、両者の翻訳ぶりを比較できるようにしました。

#### 展示4

### 『在りし日の歌』／『中原中也の思ひ出』

— 中原没後の小林

愛児文也の死の衝撃から身心を病んだ中也は、東京を離れて小林の住む鎌倉に転居しますが、昭和12（一九三七年）10月の中也の死によって、二人の交遊は終わりを告げます。展示では、鎌倉での二人の親密な交遊ぶりを、中也が残した『ボン・マルシェ日記』を通じて紹介するとともに、故郷に居を移すにあたって自ら編集した詩集の原稿を小林に託すことが記された『在りし日の歌』の「後記」と、初めて長谷川泰子との三角関係に触れた「死んだ中原」を含む小林の追悼文を通じて、互いに向けた深い思いをたどりました。

しかしながら、中也が小林に与えた影響は、生前の交遊に限られるわけではなく、中也没後の小林の作品の中にも見出すことができます。その出発点ともいえるのが、中也没後12

年を経て書かれた「中原中也の思ひ出」です。そこには亡友に対する哀切きわまりない思いが溢れていると同時に、そこに描かれた詩人像には、戦中から戦後にかけての小林の主要な仕事の根底に流れる芸術観が表れていました。

展示では「中原中也の思ひ出」の中でもとりわけ印象深い妙本寺の海棠の花に焦点をあて、戦前の絵葉書からとった海棠の写真と「中原中也の思ひ出」の一節をプリントした大きな布を二階展示室中央につり下げることで、小林の芸術観の中に浮かび上がる中也の姿を表現しました。

このパートの後半では小林の主要な作品を紹介しました。死者に「退つ引きならぬ人間の相」や「動じない美しい形」をみることが「上

手に思ひ出す事」だとする「無常といふ事」の歴史観、「モオツァルト」の音楽の本質として述べられる「悲しみ」、「ランボオⅢ」において用いられた「千里眼」という用語、「ゴッホの手紙」を「告白文学」として見る視点などは、「中原中也の思ひ出」に描かれた中也像の延長上にあります。また、「或る夜の感想」で回想されるチェーホフ、未完に終わった「感想」で論じられたベルクソン、「本居宣長」において小林の文脈に移されて紹介される宣長の芸術観など、いずれも中也の評論や日記などに書き残した言葉との深い関連性が見出せます。

展示では、互いに響き合う内容をもった中也と小林の自筆原稿を並べて、小林の長い文学的営為の中で広げられ深められていった中也の影響を浮き彫りにしました。



# 企画展。ピックアップ

# 2007

## 企画展Ⅲ

## 私の好きな

## 中也の詩

平成19年9月27日～12月16日

## 生

誕百年、没後70年を経てもお読み継がれている中也の詩。中也ファンのみならず、どの詩を、どんな時に、どんなふうに読んでいるのかを、アンケート、メッセージ、書・写真・イラストなどの作品を通じて紹介した企画展です。

記念館や山口市内各所に置いた用紙と記念館のホームページを通じてお寄せいただいたアンケートは110、メッセージは78。そして、作品は24名の方から42点をお寄せいただきました（招待作品を含む）。

アンケートでは、中也の詩の中から好きな詩を3篇選んでいただきました。男性27名、女性81名（性別回答なし2）による回答の集計は別表の通りです。残念ながら回答数に開きがあり、生誕90年の時に作成された『天使の手帖』私の好きな中原中也の詩一〇〇〇人アンケートと厳密に比較できませんでしたが、10年前は6位だった「サーカス」が1位になるなどの点が注目されました。

メッセージは男性17名、女性61名（性別不明1）とやはり女性からのものが多いのが特徴です。年齢層は10歳未満から70代まで幅広く、内容は、中也に宛てたもの、あるいは中也について書かれたものが17、その他は中也の詩について書かれたものでした。時期を区切って入れ替えながら、全



山口市民の作品と鎌倉文学館からのメッセージ

てのメッセージを展示しました。アンケート用紙に書いていただいたものはご本人の筆跡を拡大し、ネットで投稿していただいたものは活字で紹介しました。

順位	詩名	票数
1.	サーカス	34
2.	汚れつちまつた悲しみに……	30
3.	一つのメルヘン	21
4.	月夜の浜辺	18
5.	帰郷	16
6.	骨	11
7.	生ひ立ちの歌	10
8.	春日狂想	8
9.	冬の長門峡	7
	春の日の夕暮	7

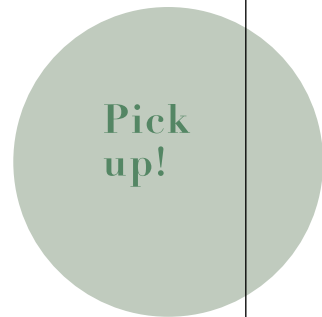
作品は、絵画・イラストが16点（9名）、写真が11点（7名）、書が2点（2名）、詩が2点（2名）、そして、書と絵画を組み合わせた作品が1点（1名）、書と写真を組み合わせた作品が5点（1名）、オブジェが1点（1名）という構成でした。また、過去に記念館で個展を開いていた吉田正、藤井宏昭の両氏に写真作品4点をお寄せいただきました。

この企画展のもうひとつの特色は、同時期に各地で開催されていた生誕百年記念イベントと記念館を結んだことです。展示室の一角に特設コーナーを設け、「山口市民から」「北九州市民から」「福島市民から」「鎌倉文学館から」の4期に分けて各地のみなさんの作品やメッセージをご紹介します。「北九州市民による『私の中の、中原中也』展」



特設コーナー「北九州市民から」

からは、絵画1点、写真2点、書3点、葉書絵59点が、「中原中也生誕100年祭 IN FUKUSHIMA」からは6名のカメラマンによる21点の写真が寄せられました。そして企画展「中原中也 詩に生きて」を開催した鎌倉文学館からは、展示を見学した鎌倉女学院中学の生徒のみなさんからのものを中心とする172のメッセージが寄せられました。370名を超える方々からの作品やメッセージによって、この企画展は支えられました。この場をお借りして心から感謝申し上げます。





## 企画展Ⅳ

# 中也の住んだ町

## 京都

平成19年12月19日〜平成20年4月20日

中 也は、16歳から17歳にかけての2年間、親元を離れ、ひとり京都で過ごしました。

中也にとつては30年という短い生涯のうちとても貴重な2年です。京都という地で彼に起こったこと、出会った人々は若かりし中也の世界を大きく揺るがし、彼を人として詩人として大きく成長させることになりました。

この展示では、中也の「詩的履歴書」と「自筆住所録」を手がかりに、彼が京都に残した足跡をたどりました。

### 1、京都へ

「大正十二年春、文学に耽りて落第す。」

〔詩的履歴書〕

山口中学校を3年生で落第してしまった中也は、当時京都帝国大学に在学中の元家庭教師・井尻民男を後見に、家族と離れてひとり京都の立命館中学校へ転校します。近所への体裁を気にした父・謙助の意向でしたが、中也にとつては窮屈な家を飛び出せる絶好の機会でした。後に「生れて初めて両親を離れ、飛び立つ思ひなり」と自身で回想しています。

ここでは、当時の京都駅や、中也の通った立命館中学校北大路学舎の写真、大正期の京都名勝を写した絵葉書など、中也が目にした京都の町を紹介しました。

### 2、出会い

「その秋の暮、寒い夜に丸太町橋際の古本屋で『ダダイスト新吉の詩』を読む。中の数篇に感激。」

〔詩的履歴書〕

中也が新しい土地で出会ったのは人だけではありません。「ダダイスト新吉の詩」、中也の詩作のきっかけとなった一冊です。それまで文学といえは短歌が中心だった中也ですが、この衝撃的な出会いにより自らもダダ詩を真似てたくさんの詩篇をノートに書きためていきました(「ノート1924」)。

そしてこの頃書かれた詩篇の数々が、更なる出会いを導きます。中也のダダ詩に共鳴し、後に同棲することになる3つ年上の大部屋女優・長谷川泰子。立命館中学校のアルバイト講師で、宿題の作文の代わりに提出された一篇の詩に目を留めた京大生・富倉徳次郎。富倉の友人で同じく京大生の正岡忠三郎。正岡を頼って京都へ「遁走」してきた、中也にとつて初めての詩友・富永太郎。中也是16、17歳という最も多感なこの時期を、彼らの交遊のなかに過ごしました。

### 3、中也の足跡―正岡日記より―

「T.K. Tn. dadaiist」

(大正13年10月2日・正岡日記)

京都時代の中也の日記や書簡はほとんど残っていませんが、正岡忠三郎の日記の中にその生活の記録を読み取ることが出来ます。中也は「ダダイスト」や「ダダさん」という名でしばしば登場し、富倉(II)と、富永(II)らとともに新京極といった盛り場に出没。互いの下宿に入り浸り、毎晩のように議論を交わしたりもしていたようです。

また、一緒に美術展(於岡崎勸業館)や動物園(京都市立動物園)、劇場(南座)などにも出入りしていたことがこの日記からわかります。大学生に交じって飲み歩く中也、17歳。

ここでは中也が京都の町のどのあたりで遊んでいたのか、正岡日記に残された中也の足跡を当時と現在の写真を交えてたどりましました。

### 4、最後の下宿

「スペイン式窓がありますよ」

(大正14年2月23日・正岡忠三郎宛書簡)

中也は後に上京するまでの2年間に、市内で8回、下宿を替えています。その引越の記録が自筆の住所録として残されており、当時の地図上にとどることが出来ます。引越の理由はより駅の近く、より学校の近く、などさまざまに推測されますが、中でも京都時代後半、富永の下宿近くに引越すあたりに後の訪問魔ぶりがうかがえます。

その後、中也は富永を追うようにして泰子とともに上京しますが、正岡へと引き継がれた最後の下宿は現在も当時の面影を残しており、中也の言う「スペイン式窓」も確認することが出来ます。ここでは、唯一今に残る京都時代最後の下宿を新旧写真で紹介し、正岡への転居通知とあわせて展示しました。

### 5、京都、再び

「また京都へ行きたくなつた。さよなら」

(昭和5年5月9日・安原喜弘宛書簡)

昭和4(一九二九)年春、中也の呼びかけで同人誌「白痴群」が創刊されます。その頃、メンバーである大岡昇平・富永次郎・安原喜弘がそろって京大へ進学したため、編集打ち合わせも兼ねて中也是再び京都へ足を運ぶこととなります。打ち合

わせ、とはいいながら京都を気に入っていたらしい中也はその後もたびたび訪れ、その地から友人へ手紙を書き送ったり、また東京から京都の友人へ彼の地を懐かしむ手紙を出したりしています。

中也の京都に対する思いは深く長く、昭和11年10月、散文詩「ゆきてかへらぬ」を雑誌「四季」に発表します。後に第二詩集『在りし日の歌』にも収録されたこの詩篇には「―京都―」と副題が付されており、「一人の縁者」のない「僕」が、自分に分からぬ言語を話す人たちのいる公園でぼんやりとした時間を過ごす様子が描かれています。

「京都ではひとりぼっちで寂しいから、公園にいつて遊ぶんだよ」「自動車にのるときでも、『ごめんやす』っていわにゃあ、『ごめんやさい』なんていうとへんな顔をするよ」と母フクに語ったという中也。中也にとつて京都とは、生まれて初めて物理的な孤独にさらされた異郷であり、振り返れば詩人としての自らを育んだ懐かしい故郷であり、そしていつでも、目に映るすべてが新しかった、在りし日の高揚の蘇る場所だったのかもしれない。

ここでは、京都に寄せる中也の思いを、書簡と作品から紹介しました。



# 中也忌

平成19年10月22日は、中也が亡くなって70回目の命日です。毎年命日には中原家の方と職員でひっそりとお墓参りに出かけますが、今年も中也生誕百年・没後70年という記念の年ということで、ささやかなイベントを企画しました。通常月曜休館のところ、臨時開館のうえ無料開放。現在確認されるうち、中也が生前最後に書いたと思われる詩原稿「秋の夜に、湯に浸り」「四行詩」をこの一日だけ特別に展示し、来館者に随時解説。15時から、長谷川泰子出演の「眠れ蜜」DVDを上映し、有志による朗読と、中也の末弟・拾郎さんと同じハーモニカグループ、フレンジーズの皆さんに演奏をお願いしようということになりました。

当日は、朝から続々とお客様が来館され、驚くほどの超満員。ちよつとすみません、と断らなければ移動も出来ない密度の高さになりました。そんな中、皆さん熱心に原稿をご覧になり、その筆跡をたどりながら「中也は帰りがたかたんだねえ」とそつと呟くお客さんも。やはり直筆の原稿には訴えかけるものがあるようです。

そして15時、館内にバツハ「マタイ受難曲」を流してイベント開始です。初めての試みでしたが、記念館にはハーモニカの音色がよく似合いました。中也も聴いた「荒城の月」、「浜辺の歌」、「宵待草」などの演奏に、70人近いお客様が聴き入り、中原副館長のギターとの共演には会場が沸きました。



また朗読会も、予想以上に中也に深く思いを寄せる方が多く、多数の飛び入り参加をいただきました。真つ先に手を挙げられた男性は朗読用にと用意した詩集は不要と「サーカス」をよどみなく暗唱され、たまたま北海道から来たという女性は感激しきりといった様子で何にしようかな、と詩集をペラペラ。「北の海」や「幻影」、「夏の日の歌」など思い思いの詩が朗読されました。

ささやかどころか、詩吟あり、歌あり、演奏ありの賑やかな中也忌になりましたが、やはり最後は福田館長の朗読「四行詩」で、中也を偲んでしめやかにイベントを終了。と聞きや、当初の上映で上映室に入りきらなかった方々のリクエストにより、急遽、「眠れ蜜」を再上映することになり、最後まで熱気にあふれた一日となりました。

最終的にその日の入館者数は343名。行楽シーズンとはいえず、平日月曜には見られない数字です。淋しがりの中也がひとを呼んだのでしょうか。

蛇足ながら、特に示し合わせた訳でもないのに職員全員が黒い中也Tシャツだったのが印象的な中也忌でした。

## 特別展示

# 山口お宝展

山口市の冬の恒例行事となりつつあるのが「山口お宝展」です。山口商工会議所が中心となつて平成18年から始まったこのイベントには、市内の神社仏閣、美術館・博物館など合わせて約30施設が参加し、それぞれが貴重な「お宝」を公開します。期間は1月中旬から2月中旬の1ヶ月です。

当館は第1回から参加しています。展示ケース1〜2台に、平成18年は『山羊の歌』校正刷など、平成19年は中也自筆原稿2点（深夜の思ひ）「春」および初出雑誌、といったように、毎年中也に関係する「お宝」を展示してきました。そして今年（平成20年）は、中原家に残されていた中也と家族の写真原版を展示しました。なかでも、2月10日に催されたイベント「中也の美弟、孤高のハーモニカ奏者 伊藤拾郎さんを偲んで」にあわせて1日だけ公開した中也18歳頃、お釜帽子をかぶった写真には、教科書や記事などでよく知られているだけに、多くの注目が集まりました。

山口お宝展は通常の企画展などに比べ期間が短く、また小規模な展示ゆえ、通常の企画展などではなかなかお見せできない資料を出すことができる機会です。今後も、期間中ご来館下さったお客さまが、少し得した気分になつていただけるような「お宝」を展示していきます。

〈追記〉平成21年は3月20日〜4月19日の開催となります。

# 開館記念日

平成20年2月18日に、中原中也記念館は14回目の開館記念日を迎えました。当日は、本来なら月曜休館のところを特別に開館し、ちょうど79年前のこの日に書かれた中也直筆原稿「雪が降つてゐる……」を展示しました。

「雪が降つてゐる……」は昭和4年2月18日、中也21歳の時、その頃詩を書きたためいたノート（「ノート小年時」）に書かれました。ちなみに、偶然にも開館記念日当日の未明に雪が降り、霽開気たつぷりの中での特別展示となりました。



4月1日	生誕百年記念限定チケット発行		
8日	生誕百年祭オープニング (於 記念館前庭) 「オープニングコンサート」(小室等、木村弓、佐々木幹郎)	24日	第39回中也を読む会 「サーカス」
14日	生誕祭 空の下の朗読会① (於 記念館前庭) 「詩のボクシング山口大会予選会」(出場者21名)	31日	機関誌「中原中也研究」第12号発行
15日	生誕祭 空の下の朗読会② (於 記念館前庭) 「Divaたちの中也」(茶木みやこ、べすば、林木林、折田成子)	9月1日	特別企画展ミニセミナー
17日	企画展 I 「第12回中原中也賞」(～5月27日)	8日	公開講演Ⅱ (於 ホテルニュータナカ) 「批評の楯円—小林秀雄と戦後、他」
21日	生誕祭 空の下の朗読会③ (於 カフェド・中也) 「子供たちによる中也」(湯田小学校、下関朗読詩の会「峡」)	21日	鈴木脩平氏(中也と同年齢の方)宅訪問
22日	生誕祭 空の下の朗読会④ (於 カフェド・中也) 「Actorたちの中也」 (北九州・交差転プロジェクト、山口・集団・歩行訓練)	27日	企画展Ⅲ「私の好きな中也の詩」(～12月16日)
27日	第35回中也を読む会「また来ん春……」	28日	第40回中也を読む会 三角みづ紀『オウバアキル』
28日	第12回中原中也賞贈呈式 (於 山口市民会館) 主催:山口市 受賞詩集:須藤洋平『みちのく鉄砲店』(私家版) 記念講演「詩人と共に生きる」 講師:大江健三郎  大江健三郎氏より『ランボオ詩集』受贈	10月8日	朗読劇「子守唄よ」山口公演 (於 山口情報芸術センター) 小口ゆい、VOICE SPACE、平川小学校合唱団(山口公演のみ参加)
29日	生誕祭 空の下の朗読会 (於 記念館前庭) 「中也生誕祭」 自由参加の朗読(朗読参加者11名) 朗読(和合亮一ほか)、 コンサート(おおたか静流) 	21日	朗読劇「子守唄よ」東京公演 (於 サントリーホール)
30日	サーカス小屋でコンサート(～5月6日) (於 山口市中央公園横特設テント) 日替わりでコンサート、朗読会等を開催	22日	中原中也忌 (於 記念館内) お墓参り、特別展示、上映会、 ハーモニカ演奏、朗読会
5月25日	第36回中也を読む会 須藤洋平『みちのく鉄砲店』	26日	第41回中也を読む会 「汚れつちまつた悲しみに……」 
30日	企画展Ⅱ「収蔵資料展」(～7月22日)	30日	中原中也記念館運営協議会
6月22日	第37回中也を読む会 「帰郷」	11月23日	第42回中也を読む会 水無田気流『音速平和 sonic peace』
29日	瀬戸内文学館連絡協議会総会 (於 ホテルニュータナカ)	12月7日	瀬戸内文学館連絡協議会学芸員・担当者研修会 (於 プラザホテル寿)
7月25日	特別企画展「小林秀雄と中原中也」(～9月24日)	19日	企画展Ⅳ「中也の住んだ町 京都」(～平成20年4月20日)
27日	第38回中也を読む会 アーサー・ピナード『釣り上げては』	21日	第43回中也を読む会 「湖上」
28日	特別企画展プロムナード・トーク(及び8月18日)	1月25日	第44回中也を読む会 蜂飼耳『いまにもうるおっていく陣地』
8月5日	特別企画展上映会(及び11日)	2月10日	伊藤拾郎さんを偲ぶ会 (於 記念館内) ハーモニカ演奏、DVD鑑賞会、特別展示
9日	公開講演Ⅰ (於 山口情報芸術センター) 「中原中也と小林秀雄—その〈宗教性〉のゆくえをめぐって」 講師:佐藤泰正	18日	開館記念日(特別開館、直筆原稿特別展示)
		21日	第5回常設テーマ展示「友情—君と僕との命はかり」 (～平成21年2月15日)
		22日	第45回中也を読む会 「月夜の浜辺」
		3月20日	生誕百年ファイナルイベント(～23日) (於 記念館及び周辺地域) 朗読会、コンサート、キャンドルイベント、ふれあいウォーク等
		28日	第46回中也を読む会 「吾子よ吾子」
		31日	館報第13号発行

## 中原中也の会

6月2日	日仏現代詩フォーラム〈中原中也の会第11回研究集会〉 (於 秋吉台国際芸術村、中原中也記念館) 「中也とランポー『季節 <small>おしろ</small> が流れる、城寨が見える』」 シンポジウム パネリスト:宇佐美斉、鈴木和成、 イヴ＝マリ・アリュー、ジャン＝リュック・ステンメツ 司会:佐々木幹郎 通訳:上田真木子、関口涼子 ポエトリー・リーディング(詩人による朗読)	9月8日	中原中也の会第12回大会 (於 ホテルニュータナカ) テーマ「中原中也と小林秀雄」 講演「批評の楯円—小林秀雄と戦後、他」 講師:加藤典洋 アトラクション 二胡・アルパ演奏、朗読 / alpha、瀬川よしみ シンポジウム「中原中也と小林秀雄—詩と批評の行方」 パネリスト:関谷一郎、新保祐司 司会:北川透
3日	中原中也記念館見学 コンサート『中原中也の詩をうたう』(会場:秋吉台国際芸術村) 谷川俊太郎、谷川賢作、小室等、深川和美	9日	中原中也の会第8回セミナー (於 ホテルニュータナカ、中原中也記念館) 特別企画展「小林秀雄と中原中也」探訪 講師:中原豊、池田誠
7月31日	会報第21号発行	12月25日	会報第22号発行

◎第13回 中原中也賞

# 『グッドモーニング』

さいはて  
最果 夕希 氏



Chuya  
Nakahara  
prize

**第** 13回 中原中也賞は215詩集の中から最果夕希氏の第1詩集『グッドモーニング』が選ばれました。

最果氏は昭和61(一九八六)年生まれで受賞時21歳。最終選考に残った7詩集の作者の中で最年少でした。兵庫県西宮市在住、京都大学に在学中で、「現代詩手帖」の投稿欄やインターネットなどの投稿がきっかけで詩を書き始めたそうです。すでに第44回現代詩手帖賞を受賞しています。

選考会では「重心を失って倒壊してゆく現代の世界を、全身的な感覚で触れている」「その依り所のないイメージ、断片化し、脈絡を失った文脈、しかし、必死に考えようとしている彼女のことばの切実な不安」に共感を得られ、高く評価されました。

いつまでもうがいをつづける、いつまでも黙り続け、いつまでも、そうすれば病気にはならない。いつまでもうがいをしている、いつまでもひとりである、脅威は足の裏でつぶしてしまった。わたしたちはだから脅威になるのかもしれない。

(うつくし)

人と人との間を疾走している。きみたちはわたしたちをなんと呼ぶ？ 名前がない間わたしたちは疾走をしている。そうして竜巻をつくりあげていく。きみたちをめちゃめちゃに切り裂きながらわたしたちはああ孤独だと叫んでいる。(ああ)

(うつくし)世界

「世界」より

若い女性ならではの、みずみずしい感性。残酷にも思える現実社会の中で、さわやかさを感ずるほどの向日性を持った詩の言葉が存在しています。十代の攻撃性と過去の経験を少しずつ熟成させながら、新しい才能はこれからどんな詩を産み出していくのでしょうか。

2008年4月-2009年3月

◎ 平成20年度 記念館関連行事予定

4月23日	企画展Ⅰ 「第13回中原中也賞」 (～7月27日)	7月30日	特別企画展「「歷程」と中原中也」 (～9月28日)	10月22日	中也命日・お墓参り
4月29日	生誕祭 空の下の朗読会 (於 中原中也記念館前庭) (無料開放日)	9月13日	中原中也の会第13回大会	12月17日	企画展Ⅲ 「中也の兄弟たち」 (～平成21年4月19日)
5月5日	こどもの日(無料開放日)	9月14日	中原中也の会第9回セミナー	平成21(2009)年 2月18日	第6回常設テーマ展示 「哀悼の詩」(仮)
5月10日	中原中也の会第12回研究集会	10月1日	企画展Ⅱ 「美と痛み—大和保男の陶と中原中也」 (～12月14日)		

※日程等、変更の場合もございます。

中原中也記念館 館報【第13号】 平成20年3月31日 表紙写真 | 生誕百年祭・特設テント(企画展「私の好きな中也の詩」応募作品より)

発行◎ 中原中也記念館 〒753-0056 山口県山口市湯田温泉1丁目11-21 TEL083-932-6430 FAX083-932-6431 E-mail:chuyakan@c-able.ne.jp http://www.chuyakan.jp/

環境に配慮し、用紙には再生紙を使用しています。印刷インキは植物性大豆油インキを使用しています。